中野香織の Luxury Quest［ラグジュアリークエスト］贅沢の本質

Photos : HIROSHI TAKASE
Text : KAORI NAKANO

vol.1

Emergency

チャップリンは予見していた!? ラグジュアリーの非常事態

特別感のないリュクスという、豊かなる矛盾の代償

「ラグジュアリー」や「リュクス」がいたるところにあふれている。

かつてラグジュアリーとしてまぶしく見えたもの、リュクスな体験としてどきどきしていたことも、なんだか「ふつうに良いもの」「経験しておいて悪くないこと」になってしまった。特別感のないラグジュアリー、身近になったリュクス（本来、言語矛盾であるが）を気軽に享受できるようになった豊かな幸福の代償として、深い感動や、全身が震えるような喜びを味わうことが難しくなった。

どうしてこんなことになってしまったのだろう？

その昔、ラグジュアリーは王侯貴族だけが享受できる特権だった。この特権を守るための贅沢禁止法（Sumptuary Law）まで存在する。古代ローマにも、中世・ルネサンスのヨーロッパにも、日本の徳川時代にも、「定の身分以下にある者の贅沢を戒める法律があった。階級制度が支える社会秩序を目に見えるかたちで守るためのもの、というのがこの法律の大義なのだが、ひょっとしたら特権階級が守りたかったのは、身分よりもむしろラグジュアリーの価値、ラグジュアリーが与えてくれる快楽のほうではなかったか、とも思う。大衆には決して許されない、ごく限られた人が享受できる贅沢。そんな特別にわがままなものであればこそ、ラグジュアリーはみずみずしさを失わなかった。

「想像できるもっとも悲しいことは、ラグジュアリーに慣れてしまうこと」と20世紀のはじめにチャールズ・チャップリンは言った。ひょっとしたらその悲しい事態に直面しつつあるらしい21世紀の私たちは、ラグジュアリーのさらなる「上」を探し続けているのだが、続々と登場する「エクスクルーシブ」「ユーバー」「ウルトラ」「リミテッド」には、うすうす疲弊を感じ始めている。ラグジュアリー探求の旅に終わりはあるのだろうか？

これからのラグジュアリーとは何なのか？　どこにあるのか？

「ラグジュアリーとは、必要が満たされたあとに始まる必要である」とガブリエル・シャネルは言う。であれば、基本的な必要を満たされたはずの私たちが心の底から必要とするものは、いったい何なのか？　驚き？　他者への慈善？　自然との共生？　癒し、それもスピリチュアルな？　すでにさまざまな試みが始まっているが、そんな「必要の先の、心の必要」を探すことに、これからのラグジュアリーの答えが見つかるのかもしれない。

なかの・かおり●エッセイスト・服飾史家。1962 年生まれ。東京大学文学部および教養学部卒業。東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得。イギリスのケンブリッジ大学客員研究員などを経て文筆業に。イギリスとその文化にも詳しい。連載記事は日本経済新聞、朝日新聞ほか多数。近著は『着るものがない!』『モードの方程式』（共に新潮社刊）など。訳書も多数手がけている

Le luxe est une nécessité qui commence où s'arrête la nécessité.

「ラグジュアリーとは、必要が満たされたあとに始まる必要である」

Gabrielle Chanel
ガブリエル・シャネル

The saddest thing I can imagine is to get used to luxury.

「想像できるもっとも悲しいことは、ラグジュアリーに慣れてしまうこと」

Charles Chaplin
チャールズ・チャップリン

Photos : Condé Nast Archive/CORBIS (Chanel), Bettmann/CORBIS (Chaplin)　Special Thanks : EASE